

2026年7月5日（聖霊降臨後第6主日、A年特定9）

メッセージ

「希望を抱く捕らわれ人よ、砦に帰れ」

（マタイによる福音書11:16-19、25-30）

司祭ヨセフ太田信三

軛（くびき）とは、もともと家畜の首にかける曲がった木材のことです。それに荷台を付け、家畜は荷物を運びます。そこから、奴隷としての奉仕や服従、抑圧の象徴となりました。

マタイによる福音書が記された当時のイスラエルは、ユダヤ戦争で敗北し、神殿は破壊されました。その苦境の中、ユダヤ人は神に立ち返るため、ファリサイ派を中心に律法を文字どおり厳格に守る「律法主義的傾向」を強め、民族の再興を図りました。しかし現実には、律法を文字どおり守ることのできない人や秩序から外れる人は排除されるようになります。人々は律法による軛、すなわち完全であることを求められる重荷を負わされ、疲れ果てていました。彼らが人々に負わせた「軛」は、神に立ち返るどころか、神と人とを分断し、人々を圧迫するものとなってしまったのです。そのような人々に向かって、主イエスは「私の軛を負い、私に学びなさい」と招かれました。

今日のゼカリヤ書の言葉を借りれば、人間は皆「捕らわれ人」です。パウロが語るように、「善をなそうと思う自分に、いつも悪が存在するという法則」に支配され、どうしても神から離れてしまうからです。神に立ち返ろうとしたファリサイ派の人々が、かえって神の御心から離れてしまったことも、その現実を示しています。残念ながら、人は自分の力だけでは、その捕らわれの状態から抜け出すことはできません。

主イエスのご自身を「柔和で心のへりくだった者」と言われます。それは、幼子のように神の憐れみに信頼し、自らの力を誇らない生き方です。そして、「私の軛は負いやすく、私の荷は軽い」と言われる主ご自身が、私たちと共に軛を負ってくださいます。だからこそ私たちは、「悪がつきまとう法則」に支配され続けるのではなく、神に信頼して歩む者へと新しくされていきます。

ゼカリヤは「希望を抱く捕らわれ人よ、砦に帰れ」と語ります。私たちはなお弱さを抱え、捕らわれ人として歩み続けます。しかし、その歩みには主イエスが共におられます。主が共に軛を負ってくださるからこそ、私たちの人生は恵みに支えられた歩みへと変えられていきます。だから、私たちにはいつも希望があるのです。